日本TCM研究所　安井 廣迪

六君子湯（世医得効方）

組　成　人参4.0　甘草1.0　茯苓4.0　白朮4.0　陳皮2.0　半夏4.0　生姜0.5　大棗2.0

主　治　脾胃気虚・胃失和降・痰湿

疲れやすい、元気がない、食欲不振、消化不良、泥状～水様便、排便回数増加、顔色萎黄、声に力がない、四肢無力感などの脾気虚の症状に加え、小食あるいは食べられない、悪心、嘔吐、腹満など胃の受納不足や胃気上逆の症状、更に、脾の運化機能が低下して痰湿を生じ、慢性咳嗽や喘鳴など肺の痰湿の症状、あるいは不眠、鬱など胸の痰飲の症状をきたしたものを治す。

効　能　健脾補気・和胃降逆、理気化痰

プロフィール

本方は、四君子湯と二陳湯の合方で、江戸時代からよく用いられ、論説や症例報告も少なくない。出典は、『医学正伝』とされることが多いが、この処方構成を六君子湯という名で紹介したのは『世医得効方』が最初のようである。但し、四君子湯も二陳湯も出典は『和剤局方』であるので、その基礎は『和剤局方』にあるといえる。

方解

本方は、健脾益気の四君子湯（人参・白朮・茯苓・甘草・生姜・大棗を入れて同煎）と燥湿化痰の二陳湯（半夏・陳皮・茯苓・甘草・生姜・烏梅を入れて同煎）の合方である。

人参は四君子湯の主薬で、元気を大補し、脾気を保養する。白朮は健脾燥湿に、茯苓は滲湿健脾に働き、協力して脾の運化を促進する。炙甘草は中焦を補い、益気する。大棗と生姜は胃気を整える。生姜は止嘔作用も有する。半夏は化痰すると共に、和胃降逆・止嘔作用を持つ。陳皮は理気化痰作用によって胃や胸や肺の痰湿を除去する。

四診上の特徴

上腹部の諸症状（胃のもたれ感、つかえ感、食後膨満感など）、食欲不振などの症状のほか、食事摂取が十分に出来ないために結果として出現した全身倦怠感、羸痩、疲れやすいなどの症状が前面に出る。

食欲は、一般にないことが多く、あっても少し食べるとお腹がいっぱいになって食べられないというものが多い。心窩部に痞塞感を訴えることもある。身体の冷え、手足の冷えを訴えるものがかなりある。便通は泥状～軟便のことが多い。時に兎糞状を呈することがある。

脈証は、理論的には、細で無力の気虚の脈に滑を兼ねる。臨床上は、弱脈が多く、有力の脈は少ない。

舌証は、理論的には、舌質は淡で嫩、舌苔は白膩であるが、無苔のこともある。ただし、乾燥せず湿潤もしくは水滑をみる。

腹証は、腹力が弱く軟弱で、胃内停水を認めることが多い。稲葉文礼の『腹証奇覧』には、後世方の処方として１つだけ六君子湯の腹証が出ているが、心下が相当張っているように描かれている。

臨床応用

■慢性胃炎、上腹部不定愁訴、NUDなど

慢性胃炎は、臨床症状、内視鏡所見、あるいはヘリコバクター・ピロリの感染の関与、更には心理学的な面の多様性など、臨床的にはさまざまな面を有し、統一された概念で処理することが困難である。六君子湯は、これらの枠組みに含まれる諸症状のうち、脾胃気虚、痰湿によって生じるものを改善する効がある。適応する病態は、ごく軽いものから、極度の食欲不振、羸痩をきたすものまで様々である。

近年では、上腹部不定愁訴や、NUDに多用される

ようになり、研究も多く発表されている。なお、小林[1]は、わが国でいう上腹部不定愁訴は、運動不全型NUDに相当するとし、六君子湯は特に胃適応性弛緩を助けるように働き、それ故、食後に腹部がはるとか、つかえるといった症状が出にくくなると述べている。

上腹部不定愁訴やNUDは、心身医学の領域で扱った方が良いものもあるが、たとえそのような症例でも、六君子湯で体質が改善されれば、精神面での改善を伴うことが少なくない。そういう点も含めて、六君子湯の適応を考える必要がある。

■消化管ポリープ

消化管ポリープを、六君子湯単独で治癒せしめたという報告はないが、カワラタケを加えて投与し、ポリープを消失させたという症例がいくつか報告されている。

■胃癌

胃癌は、漢方薬で治癒する可能性はあるものの、数は極めて少ない。その中でも、六君子湯はわずかながらでも報告のある処方の一つである。

■IBS

IBSの多くは、肝と脾のアンバランスによって発症する。このアンバランスは相対的で、脾気が普通でも肝気が強すぎたり、肝気が普通でも脾気が弱すぎたり、あるいはその両方であったりする。六君子湯は、脾気が弱い場合のIBSに対して用いられる。この場合、便通はたいてい下痢になり、便秘になることは少ない。下痢の性状は、泥状～軟便で、腹痛や裏急後重を伴うことは、他邪を兼挟しないかぎり、ない。一方、脾虚で便秘になることもある。

■潰瘍性大腸炎

潰瘍性大腸炎は、多くの場合、大腸湿熱に脾気虚が関与している。六君子湯は大腸湿熱を除去する力はないが、脾気虚を改善する働きがあり、潰瘍性大腸炎のある時期、あるいはあるタイプに用いて有効である。

■痔疾患

痔核や脱肛のうち、脾気下陥のメカニズムが関与するものがある。六君子湯は、脾気虚・痰湿の病態に用いられる処方で、脾気虚の発展した脾気下陥による痔核・脱肛に対しても有効である。ただし、湿熱の盛んな炎症の強いもの、あるいは瘀血の関与の強いものには効果は期待できない。

■鬱病、神経症、不眠

六君子湯には四君子湯と二陳湯が含まれている。四君子湯は基本的には脾胃の虚を治する薬であるが、脾胃は気血生化の源であるので、脾虚の結果、心血虚や心陰虚が生じ、不眠や鬱などの精神症状をきたしたものを改善させる可能性がある。

一方、二陳湯は脾胃や肺の痰を除去する薬方であるが、胸の痰飲を除く作用もあり、痰飲が心や胆の機能に影響を及ぼして出現した不安、不眠、鬱状態などを、化痰して改善することが期待できる。

六君子湯による鬱状態の改善は、何人かによって報告されている。松橋[2]は、自らの経験から、本方の効く鬱病は、双極性ではなく、単極性鬱病であると述べている。

佐藤[3]は、六君子湯を投与して著明な改善をみた2症例を考察し、六君子湯は心理学上、より深層にある不安症状の軽減には効果がないが、不安症状から2次的に派生した浮動性の抑うつ症状（食欲不振・疲労倦怠・不眠・過度の心配などの身体症状よりなる）には奏功する、との印象が得られたと述べている。

また、柳[4]らは、SSRIによる食欲不振、悪心・嘔吐に対し、六君子湯を併用したところ、臨床効果の増強と副作用の軽減を認めたと報告している。

■不正子宮出血

不正子宮出血には、漢方的にみていくつかの病態がある。六君子湯は、このうち脾虚による脾不統血のものに効果がある。婦人科からの症例報告は多くはないが、これまでにいくつかの治験が発表されている。なお、この病態には、帰脾湯、補中益気湯なども用いられ、臨床上鑑別を要する。

■不妊症

脾胃は気血生化の源であるので、脾胃が虚弱で気血を生じることが出来ず、結果的に血虚や気虚を呈して妊娠できない病態がまれに存在する。このような病態に対して、六君子湯は脾胃の虚を補うことにより、血虚や気虚を改善して、妊娠可能な身体にする作用があるようである。この作用は基本的には四君子湯にもある。両者の鑑別は痰飲の有無にある。

■小児虚弱体質の改善

漢方薬による小児虚弱体質の改善には、これまでにいくつかの方剤が有効であることが報告されている。六君子湯は、脾虚痰湿による虚弱体質のものに対して、これを改善する力がある。

＜参考文献＞
1. 小林絢三：六君子湯とNUD－胃適応性弛緩反応とNOの関与－. 漢方医学　23:12-14, 1999.
2. 松橋俊夫：精神医学的立場からみた六君子湯. 新薬と臨床　41:1080-1082, 1992.
3. 佐藤　武ほか：六君子湯が奏効した神経性無食欲症と抑うつ神経症の二症例. 日本東洋医学雑誌　45:381-386, 1994.
4. 柳　一夫ほか：軽症うつ病に対するSSRIと六君子湯の併用. 日本東洋医学雑誌　50:181, 2000.